

# 第17回

## 秀麗富嶽十二景写真コンテスト

### 入選作品

最優秀賞

雪後の朝

内藤 均（山梨県南アルプス市）

清八山



白簾史朗氏講評

小さな山頂、富士山も狭められた谷間の樹間にようやく、といった感じでのぞく清八山の表現はなかなか難しい。その限られた条件の中で新雪も踏まらず、周囲の情景を生かしてまとめた技量はなかなかのものである。雪後の静かな朝、風もない中のうっすらとした陽光が雪面のデリケートな質感を如実に表現している。煩雑なモチーフ、ことに富士山上の黒いマツの枝がじゃまだが、ポジションを低くしてその面積を押さえたこと、大絞りで被写界深度を深めた前景と富士山のピントの深さ、そうしたことが栄冠につながったものといえる。

推薦

川霧流れる 大戸 康世（山梨県大月市） 扇山



白簾史朗氏講評

非常に美しい富士山である。山体への雪の付き方、中間の雲の流れ、調子は完全に近く、最高の条件を最高の瞬間に捉えた秀作とってよい。やや雲の塊が中心部に片寄りすぎているきらいが気になるが、そのほかの下界の街並のかくし方、天部の空きもよく、富士山の高さを十二分に表現している。山頂がやや中心線に近すぎるが、さほどでもなく、シャッターチャンスによって富士山の色相も上乘の発色といえる。ちょっと気になるのは題名で、これは川霧ではなく、浮遊する雲塊なので別の表現がほしい。

推薦

紅雲流る 奈木 正次（静岡県裾野市） 大蔵高丸



白簾史朗氏講評

これまた非常に美しい調子で、紅が強いためにより目立つ。どこから見ても富士山は美しいが、それをより美しく撮り止めるのが技術であり、対象に対する愛である。また技術は単に露出値やカメラに関したものでなく、人間の美意識が実際の物体より、さらに美しく画面中に取り込む、つまり構図である。この作品は、美しく焼けた雲に、光は小さくとも富士がそれをしっかりと支えている。単純なだけにより強い美が人の心を打つ。

特選

いまぞ明けゆく

高宮 徹（東京都港区）

岩殿山



白簾史朗氏講評

長時間露光のため、やや相反則不軌発色となっているが、不自然でなく、より朝の感じを表現し得た。あまり長時間露光をすると画面にカブリが出て、ベタつき、コントラストに欠ける。そうした傾向が若干あるが、バランスがとれているので気にならない。富士山を思い切り長焦点レンズで引っ張り、大月の市街を切り捨てたことによって壮大な朝の情景が再現された。改めて富士山の美しさが見る人の心を打つ。



特選

春爛漫 谷口 一只（埼玉県加須市） お伊勢山



白簾史朗氏講評

まことに春らしい美しい日和りである。うっすらとヴェールがかかった春の空、これがあまりにも晴れ上がって濃い青となると春らしくなくなる。サクラの花どきになるとよくしたもので、たいてい雪が降って富士山の化粧直しをしてくれる。まったく日本の四季はよくできているが、それを表現するのはなかなか難しい。花の入れ込み量、富士山の大きさ、非の打ちどころが無い、といたいだが、サクラの花と富士山の距離が測りきれなかったか、花が少し後ピン、つまりほんの少しピントが甘いのは残念。



特選

雪晴れの朝 内藤 元次（山梨県大月市） 百蔵山



白簾史朗氏講評

典型的な「いの字構図」、いや「逆いの字構図」であり、ほとんど弱点が見られない。これで右方半分の雪をかぶった林が黒木の森で、それにびっしりと雪が付いていたら、今回の順位はどうなったろうか。ただ、全体に光がまわりすぎて神秘性が薄れたことが惜しい。もう少し早い時間帯に撮影したならば、おそらく滅多にない好条件だったろうと思う。そうしたときのため、日の出から待機して連続的にシャッターを切ることをおすすめする。

入賞

荘厳の夜明け

村上 敏幸（山梨県大月市）

雁ヶ腹摺山



白簾史朗氏講評

残念ながら夜明けの時間帯は、すでに過ぎ去ってしまい、朝だが早朝の時間帯になってしまっている。したがって題名は「荘厳の夜明け」でなく、「美しき朝のもとに」といったものの方がぴったりする。そして、実際に上空いっぱいひろがった雲は冬にはあまり見られない秋雲の美しさである。構図は完璧といってよく、題名で一段格下になってしまったわけで残念だ。題名は時間帯、光の当たり方、全体の印象で決定するのが望ましく、またことばもよく選んだ方がよい。



入賞

新緑と雲 長谷川 政雄（山梨県大月市） 姥子山



白簗史朗氏講評

これまた題名はぴったりしない。新緑はそのままでよいが、「・・・雲」はいけない。題名に必要なモチーフをどれにするかは迷うことが多いが、何といても目立つもの、美しいものといった性格付けが最優先である。この作品の場合、雲は晩春・初夏にふさわしい形とひろがりがない。むしろ、「新緑風に揺れて春雪の富士」などはどうだろう。いかにも季節が感じられ新緑と富士、双方がぴったりと合ってくるはずだ。若干、新緑を多く入れ込んだ方がさらによくなる。

入賞

色付く頂 内藤 均（山梨県南アルプス市） 小金沢山



白簾史朗氏講評

小金沢山の頂きが色付いているのか？それとも富士山か？こうした場合、主語の頂きは富士山ということになる。だから「色付く頂きから」としなければ意味は通じない。構図的にはやや繁雑すぎるので、左方と下方をともに4分ノ1ほどカット、上をほんの少し切るとずっとさわやかな秋の季節感が出て、写真も一段とよくなる。自分の作品なのだから、自分でよく考えて構図を決め、撮影時に無理ならあとでじっくりと時間をかけてトリミングすることが大切。



入賞

秋雲の彼方に

三浦 明（東京都立川市）

牛奥ノ雁ヶ腹摺山



白簾史朗氏講評

美しい秋の雲を富士山に配しての構図はよく使われるもので、実に爽やかな印象をあたえる。ただ、上空高い雲は正しく秋雲であるが、下方の雲はどんよりとして、あたかも春のどんよりした大気を思わせる。それと「秋雲の彼方に」では富士山が隅っこに追いやられた形の構図はふさわしくない。いっそのこと「秋空のもとに」とした方がよい。そうすると下方のどんよりした雲もあまり気にならなくなる。こうした組み替えもひとつのテクニックなのである。



入賞

みつばつつじと富士

権正 光夫（山梨県富士吉田市）

大蔵高丸



白簾史朗氏講評

花はほぼ満開、気持ちよく晴れた初夏の日、こうしたすばらしい山頂に立つとき、人はこの世に生まれた幸せを心から感謝する。だが、写真となると、一見、何の欠点もないように見えても必ず不備なところがあるものだ。それは周囲の美しい景観や花々、富士山に幻惑されて、ふだん考えている表現の何分ノ一も達成できないからだ。花の位置、ひろがりは万点、だが、富士山を写す時間的な不具合、富士山の向きと位置に難がある。もう少し富士山を右に寄せ、時間帯も早くすべきだった。

入賞

秋煌

大内 京子（千葉県我孫子市）

ハマイバ



白簾史朗氏講評

この作者はときどき奇妙な造語を使用するくせがあり面喰らう。煌という字はかがやくという意があり、またかがやいて明らかなさま、の意も持つ。したがってこの作品は秋のかがやきを意味するが、本来は月光とか星の光やホタルの光を形容するのに使用することばだ。この場合、富士山の白雪が光っていることか、手前のカンバ林の幹のことだろうが、それにしても偏光使用でかがやきを弱めた意味が不明だ。題名はひとりよがりではなく、万人に理解できるものを使用すべきである。全体の構図調子は上乘。



入賞

旭日に映えて 小谷 哲朗（三重県松坂市） 滝子山



白簷史朗氏講評

十二景中、最も撮影しにくく、苦勞多いのが、まず滝子山、次いで牛奥ノ雁ヶ腹摺山であろう。今回は1点が笹子雁ヶ腹摺山と高畑山、2点が小金沢山、3点がこの滝子山応募僅少であった。撮り難いというのは登りがキツイこと、手前に三ツ峠山の尾根が入ることだが、この作品はそのふたつの難点のみごとクリアーしている。厳冬の1月下旬に登ったというが、おそらく他に誰も登ってはいないと思われる。その熱意と執念が、みごと結実した秀作であり、難点を見つけないことができない。山の展望そのものの地味さで大きく損をした作品である。



入賞

朝日に染まる

愛澤 和弘（埼玉県所沢市）

笹子雁ヶ腹摺山



白簾史朗氏講評

この山頂は前方の稜線に送電鉄塔が何本も架設されていて、ポジションをとるのが難しい。作者はそれをうまくクリアーしているが、その技法としてクローズアップと下部をつぶすことで成功した。ただ、ちょっと残念な点は、富士山頂の上空が少し空きすぎたことでその分富士山の印象が弱く小さくなった。どうせなら思い切ってさらにアップにし、上下左右を詰めればより壮大な景観となったろう。フレーミング、トリミングは大胆細心ということを忘れずに。

入賞

幽玄の夜明け 高津 秀俊（山梨県大月市） 奈良倉山



白簾史朗氏講評

奈良倉山は富士山に対して遠い上、標高もさほど高くないので、他に比してやや不利な撮影地であるが、富士山の形から見ると、他の山頂にくらべて決してひけをとらない。長焦点レンズの利用によっては他で得られない美しい角度がある。この作品は645判に300ミリのレンズを使い、日の出寸前の富士山を幻想美として表現した。最近の夜景やそれに類した作品に夜景なのにまっ昼間みたいな作品が多い中、これは秀逸といえる調子をあらわしている。流石は最高賞作家だけあるとうなずけるものだ。ただ、上部が少し広すぎる。

入賞

秋彩の朝 坂井 康朗（東京都練馬区） 扇山



白簾史朗氏講評

扇山は百蔵山より高さはあるが、どうしても前山が重なり、富士山の半分をかくすので誰しも撮りにくいという。この作品は珍しく紅葉の候のもので、手前の紅葉が明るく、中間部の谷間の空間にヘイズが入ったため、前山があまり気にならない。それに最近の富士山には稀な秋口に新雪が訪れたので、非常にクリアーな調子となった。11月の何日か、日が記入してないのはいただけない。こういう不実記載は、本来没となるものであることをよく覚えておいて欲しい。



入賞

朝靄の上に聳ゆ 伊藤 恵子（東京都大田区） 百蔵山



白簾史朗氏講評

この場合、題の起こりは朝靄でもよく、前山でもよい。だが、ちょっとひねって「山波の上の朝」といった表現も洒落ている。あまり現象にとらわれず、感覚で感じをつかみとることも大切。前山の重なり合う感じ、その狭間に浮遊する朝霧（これは霧であって靄ではない）、富士山の赤熱、全体の調子、よくととのっている。惜しむらくは右下部の紅葉のひと群と、手前の霧中に見える送電塔、これが無ければ文句なく上位進出となったと思うと、本人でなくともまことに残念！

入賞

冬の華 大戸 康世（山梨県大月市） 岩殿山



白簾史朗氏講評

珍しく大月に雪が降った。選者が子供のころはひと冬に何度も、その度少なくても30センチ、多ければ50センチ近くも積った。こうしたチャンスをうまく捉えて登り、それを捉えるのは、よほど骨惜しみしない人でないとできない。陽が翳っているといても、雪の付いた樹枝で街並をかくし、その上に朝富士を載せ、全体を冷調に仕上げることによって、冬の朝を強調した。今回は2点入賞となったが、それもこの熱心さを思えばむべなるかなである。



入賞

晩秋 瀨瀬 浩恭（岐阜県多治見市） お伊勢山



白簾史朗氏講評

「晩秋」という淋しい題に比較して、とても力強い作品に思える。これは手前左方の遅い紅葉はともかく、富士山がアップなこと、そこにからむ雲に勢いがあること、全体の調子が濃いため、晩秋の透明な空気感に乏しいからでもある。こうした場合、「秋到れど、冬いまだ遠し」調にするとぴったりする。常にいうことだが作品はそのときの季節に左右されず、作品の本質を探って、そこからえぐり出すもので、題名だからといって安易につけてはいけない。



入賞

薄紅色に染まる 松本 邦弘（埼玉県入間市） 倉岳山

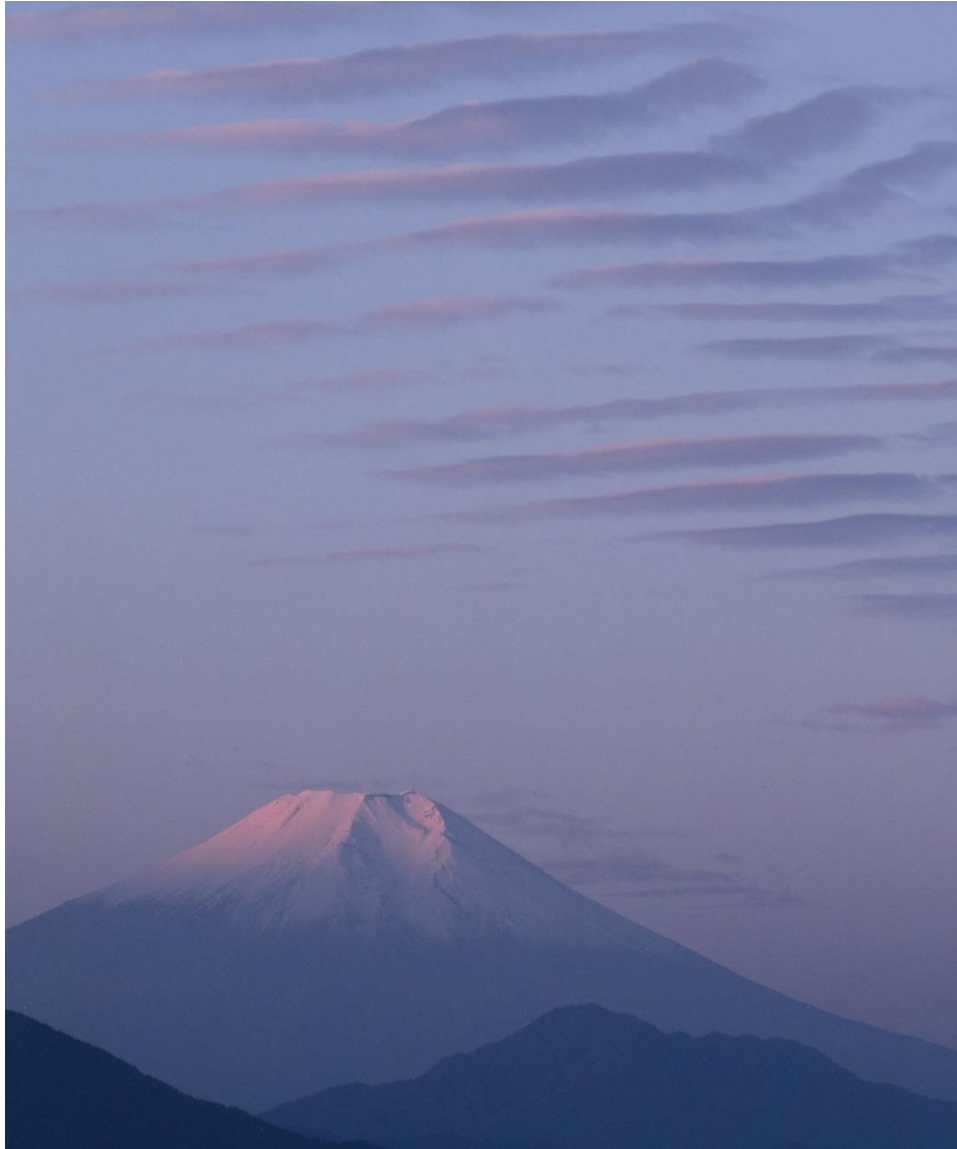


白簾史朗氏講評

撮り難い山頂でようやくものにした作品、題名を付けるのに悩む気持ちはわかるが、これではあまりに安易すぎると思う。第一、何が薄紅に染まるか不明である。この場合、空の雲であろうが、主体は富士山である。せめて「薄紅の空に富士静もる」とでもしたい。もう少し下を切り空を広くとることによって、この感じはより強調されてくる。または 150 ミリくらいのレンズで、空部の左方も広く取り入れて、下部を切る範囲は 250 ミリと同様にするとより静かな朝富士となるろう。

入賞

夜明けに雲たなびく 帯金 晃（静岡県沼津市） 高畑山



白簾史朗氏講評

これまた評ができないほど陳腐な題名であり、どうしてこんな発想をするのか、理解に苦しむ。単に現象を羅列するのでなく、その現象からポエム（詩）を探し当てることに努めたい。これなどはただ「静寂の朝」でも「静寂の夜明け」でもいい。富士山頂の光も少しで淡く、上空の雲も細く淡い。すべてが静か、という印象に通じていることを考えればおのずと題名も定まってくる。一度で決めずに、何度も反復推敲して、自分でこれぞという題をつかみとることを練習すべし。

入賞

白雲湧き立つ 谷崎 耕史（大阪府大東市） 九鬼山



白籙史朗氏講評

惜しむらくは、この作品が夏に撮られたとしたら、このように淡い調子でなく、もっとコントラストがついた強烈な個性を持つ作品になったと考えるとまことに残念だ。11月でありながらヘイズが立ちこめて、気温は高く、したがって秋には通常出ない形の雲まで湧いてしまった。ヘイズ、冠雪、白雲の三拍子ではどうしてもメリハリのない調子となる。切り取り方は申し分ないのに、天が作者に味方をしなかった故の結果であった。ぜひ次回にがんばって下さるように。



入賞

静かに明ける 山崎 勝孝（神奈川県藤沢市） 高川山



白簾史朗氏講評

非常に好条件な朝であり、その好条件を十二分に生かした撮影だったといたい。惜しむらくは105ミリでなく、200ミリ前後にのぼして撮影していたなら、もっと迫力ある作品となったろう。アマチュアの方はどうしてもシャッター時というか、作画の際、臆病になって思いを切ったことができない。ここはもっとアップにして、題名も「あかあかと明ける」と「あ」を連ねて心理的にも強調すべきだった。いつも注意するように、あらゆる工夫をして数多くシャッターを切ることが第一。

入賞

雲わき立つ朝

宮地 広之（東京都世田谷区）

本社ヶ丸



白簾史朗氏講評

どうしてこんな小さな雲を見て、「雲わき立つ」などいえるのか理解できない。それともこれから雲が大きく湧き立つことを予想しての題名なのかわからないが……。作品としては富士山に力があり、画調も悪くない。シャッターチャンスも良好であるが、この左下方の小さな雲が、折角の作品にそぐわない。やはり、こうしたことは全体のモチーフを見合わせるしかない。雲の出る前か、雲がもっと発達するのを待ってのチャンスを生かすべきであった。

入賞

紅色に染まる。 福井 一夫（埼玉県狭山市） 清八山



白簾史朗氏講評

山崎勝孝、宮地広之の両氏と非常によく似た撮り方であるが、山崎氏はもっともオーソドックスだが、作品的にやや弱く、宮地氏の作品が一番整っているが調子が弱い。その点、この作品は調子も強く、しかも山頂を思い切って右に寄せたことが動きを呼んで力強い。またこの3点作品に共通することは、富士山頂の上空が広すぎることで、それで富士山の日本一の高さが減少してしまっている。作品はホンのちょっとしたことで良くも悪くもなる。他と比較し、自分の作品を推敲して、つねに最善の結果を求めることに尽きる。



## 総評

審査員長 白籬史朗

早いもので、このコンテスト開始からすでに17年目となった。今回の審査は本年1月18日午後1時30分より、大月市役所・3階会場に於いて開始、午後4時に終了した。

第17回コンテストの応募者総数44名、応募作品点数212点、前年比で1名及び29点の減少であった。この減少傾向は昨年1年の天候不良と世相の不景気風が若干影響しているものと思うが、それでも市内では2名に4点、新規応募1名のプラスであり、県内でも応募点数のみ11点の減。県外では応募者3名の減のみで、新規応募者5名と増加の傾向にある。ちなみに全体の傾向から見ると、このコンテストの質的向上が面白半分の人や、ただ写真歴が長いだけで質的向上の見られない人の応募を阻んでいるとも考えられる。それと毎々記すことが、どうしても質的に勝負にならないデジタル印画は相変わらず応募があるが、その点数も急速に減ってきている。

そうした点から見ると、本年の応募作品はよりすぐれた作品ということができ、こうしたコンテスト部門で1~2を争うだけの質の高さを持っていると評価がよい。

本年の応募者中では、ほとんどの入賞者がベテランで占められたが、やはりベテランといわれる人たちは倦まずたゆまずの精進をつづけ、それが入賞、ひいては上位への入賞につながっていることがわかる。

今回、最優秀賞を獲得したのは南アルプス市の内藤均氏である。氏は第16回に初入賞、今回2度目の受賞でありながら最高位取得となった。続いての推薦はベテラン大戸康世氏であり、同氏は第11回の特選を足がかりに、のち3年を雌伏、第15回に入賞2点、第16回特選、今回推薦と上昇気流に乗ってきた。もうひとりの推薦は奈木正次氏、すでに伝説化しているが初応募からの最優秀賞5回、第7回、8回の特選、9、10回の入選を果たし、その後は後進のため応募を中断していた。

特選の高宮徹氏は第15回に初入賞で、2度の入賞、次いで第14回初入賞の谷口一只氏はさらに第15、16回と入賞、それが今回の特選となった。内藤元次氏は第9回から13回まで、毎回入賞であったが、その後、第14~16回まで間隔が空いた。今回は一段上がっての特選となった。

入賞の部では村上敏幸氏が第14回初入賞、第15回特選、第16回入賞、今回も入賞と4回連続である。次いで長谷川政雄氏は第14回に初入賞、以後、第15回と今回と、3回の入賞となる。

三浦明氏は今回初入賞、今後はまだ未知数であるが、いずれ頭角を現してくるものと期待させる何か？を秘めている。さらに古くからの応募に名の見えていた権正光夫氏も、初入賞は第10回初入選、次いで第11回・13回も入賞だったが、以後間が空き、今回ようやく4度目入賞となった。

ちょっと異例であったのは大内京子氏で第15回に最優秀賞をゲットした。しかし、今回は入賞のみであった。

小谷哲朗氏は第7回、第9～11回、13回と入賞し、10回には推薦を合わせ取得、14、16回もともに推薦という実力派、いずれ最優秀賞も近いと思われる。また夫人の小谷加代子氏も第8回、10回、12回の入賞を果たしていて、第10回は夫妻での入賞であった。

愛澤和弘氏の歴史はまだ浅く、第14回、16回、そして今回が入賞歴だが、やがては他にぬきん出てくると思われる。

さらに高津秀俊氏であるが、今更ながらいうまでもなく、第5回の入賞を皮切りに、8、9、12～16回と入賞8回、特選が6、7回と2回、推薦は8、10回と2度、そして第11回には待望の最優秀賞を獲得した大ベテランである。坂井康朗氏は第8～9回に各入賞、伊藤恵子氏は第15～16回の入賞。ここでベテラン瀨瀨浩恭氏である。第4回の特選以後、8回の入賞があるが、まだ最高位に届いていない。体調を崩されたとかで、いささか心配であるが、夫人の麻實氏の3回の入賞歴中、2回の夫妻ともどもの入賞がある。一日も早く芽が育って欲しいものである。

派手で撮影し易い山頂を選ぶ人が多いのは当然といえるが、まったく地味で写しにくい山だけを選び、そこからの富士山に執念を燃やす、奇特ともいべき人は松本邦弘氏である。秀麗富嶽十二景と銘打っている主催者側としては、そのすべての山頂からの富士山を欲しいわけで、この倉岳山のみ7年連続で撮影応募して下さる方には感謝感激なのである。他の山としては笹子と牛奥ノ雁ヶ腹摺山、滝子山、小金沢山、姥子山、奈良倉山、扇山、百蔵山、高畑山などを、是非もっと撮影して欲しいと考えている。ここでついでであるが、九鬼山の山頂は私有地であり、植林の丈がのびて富士山を撮りにくくなったため、他の山を検討中である。腹案としては大月・岩殿山の対面にある御前山(720m)が候補にのびているので参考にして頂きたい。

さて、つづきであるが帯金晃氏、彼はここ6期ばかりの応募であり、5回入賞しているが、あと一步踏みこむことによって上位進出を充分可能と思われる。高川山の谷崎耕史氏は今回初めての入選で、恐らくは初入賞と思われるが、未知数であるが故、期待したい。山崎勝孝氏はあまり出品していない感じだが、13、14回と連続して特選をものにしていく。宮地広之氏は古い常連といえる作者であるが、推薦1回、入賞5回と、11回ごろから頭角をあらわしてきた。

最後の福井一夫氏であるが、昨年が最初の応募、今回の入賞で2度目である。こうしてみるとまことに多士済々といえ、来期のふた明けが待ち遠しい位である。

ここでちょっと淋しいのが、このコンテスト開始時から昨年まで連続16回欠かさず出品していた天野昭吾氏が、今回出品が無かった。この間入選しなかったのが2回から5回までの4回のみで、入賞9回、特選2回、推薦3回、最優秀賞1回と、錚々たる実績である。それともうひとり、八巻長子氏で入賞9回、特選・推薦各1回、これも大変なものであるが、やはり応募がなかった。

このお二人は、何か体調がお悪いとか、お仕事の関係で都合がつかなかった、というお話もあるが一日も早い復帰を期待している。

他にもお二人、高橋利延氏と高橋英子氏はともに今回、惜しくも選にもれたが、両者とも最優秀賞作家でもあり、来期こそ捲土重来を果たしていただきたい。そのほか、今回出品していただきながら紙ひとえで選外となった方々と、古くから応募されていてお名前を記憶している作者の皆さん、ここに順不同であるが、お名前を挙列させていただいて、さらなる応募をお願いします。

佐野文隆、天野喜夫、丸山敏幸、加藤公男、藤本紘一、竹田辰巳、加藤泰郎、松里房子、谷地光明、小林博、伊藤茂、流石匠、遠藤潤、境実、斎藤年文、山賀一男、岩田修二、萩原淑之、山田岑二、瀬沼茂雄、片岡初枝、北沢清行、高村茂ほかの諸氏（敬称略）、そのほか、ここにお名前を挙げられなかった方々も、何卒宜しく願い申し上げます。

それと最後に申し上げたいことは、今回も押しなべて題名の付け方に難があったことで、応募される方はみな、題名は作品の表現の大半を担うものだ、ということを強く意識して慎重の上にも慎重に、推敲に推敲を重ねて決定していただきたい。このことは応募用紙へのデータ記載とともに、審査上、大きな重みを持つことを強く意識して欲しいと思う。